

## 禅と桃のおいしい関係

玄 侑 宗 久

こんにちは。

大体お葬式でも前の方がまばらになるんですけど、そういう感じですね。今日は二時三十五分くらいまでということで、ちょっと短いですけども、よろしくおつきあいの程お願いします。

禅と桃の、先程「優しい関係」とおっしゃったような気がするんですが、「おいしい関係」です。

桃というと桃尻娘なんていうのもありますので、色っぽい方を想像される方もいらっしゃるかと思うんですけども、それでもないんで、予めお断りしておきます。

私の住む街は福島県の三春と言いまして、三つの春が一緒に来るということから、そういうふうに命名されたとい

われております。

梅と桃と桜がほぼ一緒に咲くんですね。一緒に言いましても梅がちょっと早いです。そして、桜がその後に続いて、まだ梅も桜も散らない内に桃も咲き出すということになります。もうちょっと南にいきますと梅、桃、桜の順番ですけど、北の方は梅、桜、桃の順番です。

日本を代表する春の花木が梅、桃、桜だと思いますが、桜は十分にめでられていると思うんですね。皆さんも花見をしますし、あれだけめでてもらえる木はなかなかない。「昨日より今日よりも今桜かな」というような句もあります。元々禅と桜というのはあまり合わないのですが、どちらかというと浄土教のイメージ、西行法師がこよなく愛し

禅と桃のおいしい関係（玄侑）

たのが桜です。日本人にとつては非常に大事な木であります。

梅と言いますのは道元禅師の『正法眼藏』に「梅華の巻」というものもありますが、日本人はとても好きですね。

「梅が香や 乞食の家も 観かるる」。

梅の香が乞食の家にも等しく匂つてくる。割合庶民的な花というイメージがございまして、どこまでも入つて来るのが梅の香であります、また天神様になった菅原道真には「東風吹かば匂起させよ 梅の花 主じなし」とて春を忘るな」という歌もあります。天神様のイメージでも知られておりまして、梅もかなり日本人には愛されています。

しかし、桃というのはどうも褒め方が足りない。どんな褒め方がなされているかと言いますと、道元禅師も桃の歌は詠んでいらっしゃいます。

「春風に 綻びにけり 桃の花 枝葉に残る 疑いもなし」。

この歌からもわかりますように、桃というのは一言でいえば無邪気、天真爛漫、疑いのない心というわけですから、

ある意味では無垢ということでもあるだらうと思います。梅とか桜は非常に褒めたたえる歌も言葉も多いんですけども、桃は禅と非常に深い関係にありながらなかなか褒める言葉が少ないということで、あえて今日は禅と桃の関係を取り上げてみたわけです。

単純化して申しますと、梅というのはどちらかというと苦労すればする程、寒ければ寒い程強い香を放つというふうに考えられておりまして、また剪定をするのは梅だけですよね。

「桜切る馬鹿 梅切らぬ馬鹿」と申しますが、剪定——つまり基準に合うように整えていく。これは一言でいりますと儒教的であります。頑張つて枝ぶりを整えて、形もよくなつてみんなに好かれる姿になろうというような考え方があることは感じられます。

桜は、元々桜という音が「さ」というものが降り立つ場所、「座」と書いて「くら」と読みます。これは折口信夫の説ですね。

「さ」というのは何かと言いますと農業の女神です。農業の神様を古い時代に「さ」と呼んだわけです。

そうして「さ」がいらっしゃったというんで、田植えをする、畑を耕す、ということがおこる。農業の女神の命を受けて田んぼに稻を植えるのが早乙女であります。「さ」の乙女ですね。

時々この農業の神様というのは機嫌が悪くなる。乱れるわけでありまして、それを「五月雨」と呼んでおります。桜というのは、この「さ」という農業神の降り立つ場所というふうに崇められておりますから、非常に神に近い。梅というのは先程申しましたように儒教となじみがいい。そして桜だけが日本の木であります。

梅も桃も中国から入つて来た木でありますて、梅は中国のどちらかというと北部、つまり儒教圏の木であります。桃というのは中国南部、江南地方というような呼び方もいたしますけど、南の方から入つて来た。これはどちらかといふと道教圏であります。

道教では、三千年に一回しかならない桃の実というのが

ありまして、これを食べると不老長寿が得られるというふうに信じられています。ずっと信じていたんですね、中国人は。不老長寿というのは可能なんじゃないかという

ことを十九世紀までは信じていましたね。最近はどうも死なないというのは無理みたいだと気づいたみたいでけども。

陽貴妃にいたしましても、不老長寿のものをいろいろ家来に搜させて食べたり、体に塗ったりということをやつてたみたいですね。私の行つてました大学にも、陽貴妃がつけていた白粉を再現して作つてているという先生がいらっしゃいまして、その方は白粉だけじゃなくて、どんなに高い所から飛び降りても怪我しないようになる技術というのを磨いてまして、最初一メートルくらいから始めるわけですね。

翌日は一メートル十センチ、段々段々高い所から飛び降りていくんんですけども、毎年その教室からは怪我人が出て学生が骨折したとか、そういうことがありましたけども、あの先生もどうも不老長寿というのを信じていた節があるんですね。

桃には、そうした不老長寿という側面があるわけですが、ご存じの桃源郷というのもまた桃煙の先にあつた。仏教でいう極楽であります。

禅と桃のおいしい関係（玄侑）

『桃花源の記』というのを陶淵明が書きましたが、これは実際にあつた落人部落みたいですね。

中国に、始皇帝という皇帝のいた秦という国がありますね。あの秦の民族が山奥に住んでいたらしいんですね。それが六朝時代になつて、平家の落ち武者みたいに住んでいるのが発見された。そこが非常に素晴らしい所だつたという話のようです。

桃源郷というのも桃のあつた所であります。

桃は、道教と密接に関係しています。皆さんには、あまり道教の跡形というのを今具体的に感じることは少ないだろうと思うんですが、当初日本が国を整備するのに使つた概念というのは主に道教のものだつたわけです。

例えば、八色姓やくしきのかほねという役職がありますけども、その中に何とかかんとかの真人まひとという位があります。真人というのは老莊思想の莊子の言うところのシンニンでありまして、完全に道教の言葉です。

あるいは、今神社と呼んでおりますけども、神道のあの社ですね。神社というのも道教用語。それから、三種の神器というものがありますが、これも道教用語です。

本当に道教というのは、初期の仏教成立の時にも非常に影響を与えています。例えば衣の色つてありますね。

曹洞宗の場合にはトップの方というのは黄色ですよね。一般の方が考へてどの色が偉いのかなというふうに思つた時に、まずどの宗派にも共通するものとして紫色ということがあります。

聖徳太子の定めた冠位十二階でも、紫色が上位なわけです。これは、まさしく道教の考え方でありますし、紫を高貴と見るのは道教です。ところが道教というのは、国家の概念を作るには非常に不向きな個人主義的な教えであります。ですから、後に儒教が被さつてくる。儒教は紫色が大嫌いなんです。紫は下品だろうというのが儒教でありますし、儒教が大好きなのが黄色とか緋色なんですね。

ですから、臨済宗も曹洞宗もそうですけども、紫色の上に緋色の衣とか黄色い衣とかが乗つかつてきました。

これはまさしく道教的な影響の上に、宗教的なカラーが被さつてきたということがはつきり見える事柄であります。

そういうわけで、儒教が後に非常に強く被さつてきますので、道教的な禅のカラーというのが桃を初め段々なくなつ

てくるんですね。

禅語のなかで、桃が出てくるものと言いますと「桃花春風に笑む」、桃の花が春風に微笑んでいるというようなものがありますが、そのくらいでしょう。ほとんどないんですね。禅というのは達磨さんが崇山に籠もつて始まつたとされているわけですが、この崇山というのは元々道教の聖地でしたから、道教の影響を非常に強く受けているはずなんですね。ところが、それが時代が下つてまいりますと桃が排除されてどんどん梅になつていく、道教が排除されてどんどん儒教的になつていくことが起るわけあります。

古い時代に桃が非常に珍重された例をお話し申し上げたいと思います。

中国では、昔から三月初めの巳の日に水辺で身を清めるという習慣があったそうですが、これが日本に取り入れられまして七〇一年、文武天皇が「曲水の宴」というのを開いた。曲りくねつた水辺で宴をするんですね。その時に、これは『蜻蛉日記』に書いてあるんですけども、桃花酒を飲んだとあります。桃の花を浮かべたお酒を飲んだそうです。

す。

桃の花を浮かべるなんて、お洒落だなと思われるかもしれませんけども、そういう簡単なものじゃなくて、桃といふのはもうちょっと深い意味があります。例えば、皆さん、お寺でお札というのがありますよね。お札というのはお寺でも神社でもありますでしょう。お寺でも神社でもあるものというのは大体どこから来ているかと考えますと道教から来ているのが多いんですね。お札というのは元々道教の道具。お守りとかも道教が考案したものです。

ですから、神社とお寺の両方に置かれていたりするわけですが、元々お札のことは桃符という。なぜかと言いますと、お札というのは桃の木で作つたんです。しかも桃の木の東側の枝で作つたのが本格的な桃符であります。

何でそんなに桃に拘つたのかということになるわけですけども、日本の場合は『古事記』の中にイザナギが奥さんのイザナミに先立たれた話が出てきますね。黄泉の国に行つちゃつた奥さんを追いかけてどんどん行きますよね。

黄泉の国というのは土の中です。どんどん追いかけて行くというのは、つまりとうとう腐乱した遺体を見てしまう

わけです。

元の夫ではあっても、この顔を見られたからには返してなるかということになりまして、追いかけて来るわけです。どんどん逃げる。イザナギは逃げる。イザナミが追いかける。そして、途中いろんなものを投げるんですね。投げつけるんです。イザナミに。山ぶどうとかいろんなものを投げると山ぶどうを食べている間だけ時間が稼げる。それで、まだしつこく追いかけてくるので、最後にイザナギがイザナミに投げつけたのは桃三個です。

というのは、この桃に特別な力があるというふうに思われていたからであります。

その特別な力というのは何かと申しますと、先程「枝葉に残る疑いもなし」という道元禅師の歌を紹介しましたけれども、無邪氣という言葉で申しました。邪気に対して一番対抗できるのは無邪氣なんだという考え方であります。邪気に対して邪氣で対応するというのがアメリカとイラクのようなもんでありますけども。この邪氣が一番弱いのは無邪氣さんだという考え方なんですね。

禅語で「瞋拳も笑面を打せず」という言葉があります。シンケンというのは怒りの拳です。怒りの拳も笑った顔は打てない。これは、こつちをすつかり信じ込んでいたる無邪氣な人は殴れない、ということですね。怒りも萎んじやうわけです。

これが、日常生活でできたらどんなにか素晴らしいだろうと思うんですね。しかしながらこうが怒つてくるとこつちも怒っちゃう、というのが普通であります。どんどんそれがエスカレートしていくわけです。

平安時代、この桃が邪氣を払うというのは一般人の常識にまでなっておりまして、例えば『延喜式』という本には、大晦日に「鬼遣らい」という行事をしたことが出てています。「追籬」という言い方もしますけども、この日には鬼をやつけるために桃の木で作った弓と葦で作った矢を持つ。そして、桃の木の杖を手にして鬼を追いかけたとあります。

また『今昔物語』から類推すると、死者を出すと陰陽師が鬼が来るといって脅したわけですね。

鬼というのは何かというと、中国語では死んだ人のことを言うんですね。死者は全部鬼なんですね。

「魂」という字があるでしょう。魂という字には鬼が付いているでしょ。左側に云と書きますけど、あれは雲です。亡くなつた死者の中で空に上つていくものが魂なんです。

「たましい」というのはもう一つ字がありまして、左に白いと書きますと「魄」。これは「ハク」と読みます。これは死者の中で骨の白い所に残るものこれを言つたわけですね。いずれにしても鬼というのは亡くなつた人のことだつたんです。

亡くなつた人は、どつちに行つちやうのか、というと、丑寅の方角だと言ふんですね。丑寅といいますと北東ですね。よく鬼門と言いますでしょ。鬼門といふのは鬼の門です。鬼の門といふのは死者がそつちから出入りするといふことであります。

亡くなると鬼になる。それが、丑寅だといふんですから、牛の角を付けて寅のパンツを履かせたといふのが日本の鬼の基です。ああいう鬼を日本人が造形したんですね。鬼といふのは完全に元は死者のことです。

その亡くなつた人が出ますと鬼が来るぞと言つて陰陽師なんかが脅したわけです。

その時にどうしたかと申しますと、門の所に桃の木を大量に切つて来て、門を塞げ、ということを言つたんですね。桃の木がそこにあると鬼が入れない。邪氣が入れない無邪氣。それが桃の木だつたわけです。

これが発展して、「桃太郎」という話ができるわけです。鬼をやつつけに行くのはなぜ桃太郎なのかといふと、桃にそういう力があるからなんですね。

私が修行をしておりました天龍寺という所は、大きな方丈があるんですけども、方丈の屋根の屋根瓦、普通は鬼瓦をするでしょ。あれは鬼に対抗するために鬼を置いてるわけですね。アメリカとイラクと一緒になんですね。

しかし天龍寺では、屋根瓦の上に桃があるんです。鬼は置かない。

そういうのが昔はあつたんですね。最近桃のすごさというのが全く忘れられているという気がするんですけども。中国の方に行きますと、中国の一番古い国であります殷の遺跡から、桃の種が大量に出土しております。あの時代から桃は沢山食べられていました。

日本人の場合は桃といふと花なんですね。どつちかとい

うと。中国人の場合には、桃と言いますとあの実なんです。

「桃李 ものいわざれども 下自から 径をなす」という

言葉がありますが、桃や李の下には人が大勢集まりますと

いう言葉なんんですけど、花が綺麗だからじゃないんですね。

桃と李の実がおいしいからなんです。

殷の後の周の武王が戦をやめるぞという時も「馬を桃林の野に放す」ということを言つております。桃林というのは桃の林であります。

ですから、戦に使つていた馬を桃の林に戻す。つまり桃といふのは平和の象徴でもあるわけです。

周の時代に沢山書かれた詩を集めたのが『詩經』といふ本であります。これをまとめたのが孔子ですけども、その中に、皆さん多分ご存じだと思いますが、「桃の夭々たる灼々たりその花。その子嫁げばその室家によろしかろう」というような歌があります。

若々しい桃のよし娘。桃の夭々たるという言葉でずうつと続くんですけども。とにかくいい娘だということを言いたいわけですね。『詩經』独特的の修辞法でありますけども、言いたいことを言うのに、まず自然描写を最初に持つて来

る。そこに「桃の夭々たる」という言い方が出てくるわけです。若々しい桃のようだと。その女の子を褒めたいんですね。

どういう女の子なのかと言いますと、その詩をよく読んでみますと実が大きい。多分、胸もお尻も大きかったんじゃないでしょうか。それから、茂った葉。葉がよく茂つている、ということは、ちょっと毛深いということでしょうかな。つまり、強い生命力を感じさせるんでしようね。

無邪気で天真爛漫であるという少女のあり様が褒められているんですね。

こういう女の子が嫁げばその嫁ぎ先は恐らく幸せになるだろうということが歌われているわけであります。

これは、皆さんよくご存じの儒教的な考え方からすれば、とんでもないでしよう。無邪気ならいいというもんじゃないでしよう。儒教は礼の教えですから。礼儀作法を学んでお茶もお花もやつていなければいけない。そういう女の子じゃないと嫁いでからうまくいかないんじやないかというふうに考えるのが儒教なわけです。「仁義礼智信」という五徳（五常）を大事にするんですね。

しかし老莊思想から言わせれば、仁義なんていうものは本来の道が廃れたからそんなもの煩く言わなければならぬんだと考えます。「大道廃れて仁義あり」と、『老子』には書かれております。大道が廃れたからこそ仁義が盛んになつてくるということあります。

心が亡くなつたから礼儀を必要とすることになつてきました。

桃の世界というのはそういう礼儀とか仁義とかそういうものが生まれる前の無邪氣で優しいそういう女の子なら、さぞかしいだらうなと言つているんですね。大事なのは礼儀作法ではなかろうと。そういう世界であります。

先程日本では桃が描かれるのはほとんど花の方だと申しましたけども、日本で桃が描かれた最初は、恐らく『万葉集』の中の大伴家持の歌であります。

「春の苑 紅匂う桃の花 下照る道に いでたつ乙女」というのがあります。

紅匂う真赤な桃だつたんですね。真赤な桃に日が差してゐる。その桃の花を透かして、太陽の光が下を照らしているんですね。乙女の顔をほんのり赤く染めているという景色であります。

ですから、礼儀作法とかそういうのじやないんですね。本質的に生命そのものを称えているという世界が感じられます。

当初出てくる桃というのは日本においては花なんですね、今申しましたように。

大伴家持に出した大伴家主の手紙というのもあります。「桃花臉まぶたを照らして紅を分かち」という言葉が出てきます。けども、桃の花と太陽の光が混ざつて目に届いて非常に美しいという様子だと思います。

ところが日本にも、やがて実を食べる桃が入つて来るんですね。この、実を食べる桃の代表が蟠桃といいます。バントウって、旅館の番頭さんじやないですよ。虫編に一番、二番の番と書きます。蟠るという字です。

バントウのトウは桃ですね。なんで蟠つてんのかと言いますとひつぶれてるんですね。桃太郎の桃みたいにすんなりした形じゃなくて、ちょっと潰れた形なんです。扁平なんです。これを持って来たのが禅宗の坊さんです。

妙心寺という、京都のうちの本山ですけども、その妙心寺の山内には蟠桃院というお寺があります。この桃に縁の

禅と桃のおいしい関係（玄侑）

お寺であります。

だから、禅というのは桃と元々非常に深い関係なんですね。

蟠桃というは別名「坐禪桃」とも言います。結構毛が生えた桃です。桃で毛が生えてないのをネクタリンと言います。

禅と言いましても大まかに言いますと二つの禅があるんですね。

初祖達磨さんに起こった禅が、二代、三代、四代、五代とります。五代から六代に移る時に代表的な弟子が二人で起きるんです。一人は非常に優秀な弟子だつた。その名も神秀と言います。神のように優秀だと書きます。一方、ウソかホントかわかりませんが、その道場にぼ無学文盲だつたといわれる慧能という弟子がいた。無学文盲だという割には「金剛經」の言葉を聞いて修行をしようと思った、と言われますから、無学文盲ということはないと思うんですけども。後に六祖になる慧能と神秀という二人の方がいらっしゃったんですね。

この二人が、ものすごく家風が違うんですね。禅という

のはこの二手に分かれるわけです。

神秀という人はどういう人だつたかと言うと、瓦を毎日磨いていればそのうち鏡になるだろうという、極端に言うとそういう大変な努力家です。毎日毎日とにかく真面目にやつてないと悟りは開けないんだというふうに考えていた人であります。

師匠の五祖弘忍<sup>ぐじん</sup>大満という方が自分の今の心境を漢詩にして貼り出しなさいと弟子に言うんですね。

そうすると、この神秀は非常に素晴らしい漢詩を張り出すわけであります。ご存じの方もいらっしゃると思いますけども。

どういう歌かと言いますと「身はこれ菩提樹 心は明鏡台のごとし 時時に努めて払拭し 霉埃を惹かしむことなかれ」というんですけど、つまりこの身は菩提樹のようなものであると。お悟りを開く木ですね。心は鏡のようなものだと。鏡に塵が着くでしょう。塵、埃が。それを毎日綺麗にする。そうすると埃が着かない素晴らしい心ができ上がるということを言つてゐるわけです。

それに対して、さつき申しました六祖慧能という方、こ

の人は正式な修行僧というよりも台所の手伝いで、毎日石臼で米を搗いていたといわれる人です。その人が、しかし

老師から見ると、本質的なことをわかつてているという詩を貼り出したわけですね。さつきの神秀に対抗して貼り出した詩は、いちいち神秀の詩に逆らっていました。

〔菩提もと樹なし 明鏡もまた台にあらず。本来無一物。何れの処にか塵埃を惹かん〕。

実はこれ、菩提樹だというけれど樹木なんてどこにあるんだと。心は鏡だというけれども、そんな鏡台みたいなものを抱えているわけじゃないだろう。本来無一物なんだし、一体どこに埃が着くというのか、というふうに言っているわけです。

この二人の家風の違いで、即ち北宗禪と南宗禪というものが分かれるんです。

神秀の毎日埃を払いましようというのは北宗禪、儒教的な禅です。戒律を重視する戒律禪というものになります。これは、日本には伝わってきていません。韓国なんかで時々大騒ぎする禪僧たちいるでしょう。曹溪宗って言うんですけど、あの人はたちは北宗禪です。日本にはついぞこの北

宗禪というのは伝わらなかつたんですね。梅的な禪は伝わらなかつた。

日本に将来されたのは、この六祖慧能の系統でありますから、「本来無一物、何れの処にか塵埃を惹かん」という、そういう禪であります。これを南宗禪と言います。

ところが、その南宗禪として伝わつた禪が、段々段々儒教化したということを私は申し上げたいんですね。

つまり、どうしても江戸時代というのは朱子学が国家の學問になつちゃうわけですから、儒教的な価値観に逆らつてはなかなか生き延びられない。ですから、元々桃の無邪気さをめでるような禪であつたわけですからけれども、礼儀作法を大事にするという、どちらかといふと儒教的なものに変質していくということが起こります。

桃的無邪気さということを申し上げておるわけですが、『老子』という本には、「笑わざればもつて道となすに足らず」という言葉があります。素晴らしい道、本質を言いたてた道というのは、眞面目な顔をしているもんじゃないんだと。聞いたたら笑つちゃうようなものなんだよということを言つてるんですね。

老莊思想というのは非常に子どもを尊びます。老莊が一番理想とするのは「柔弱」ということで、柔らかく弱いということがじつは最も強いことなんだというふうに考えるわけであります。

これは乳幼児のあり方ですね。そこに我々も回帰できないか、というふうに考えるのが道教であり、その道教の上に乗つかったのが本来の禪、とりわけ南宗禪であつたわけです。

人は成長しますと頭を使つてものを考えるようになる。言葉や論理を使ってものを考えるようになる。これは、分別といわれます。「幼な子の 次第次第に智恵づきて 仏に遠くなるぞ悲しき」という歌もありますけども、子どもの頃は無邪氣でよかつた。

例えばまんじゅう一つの皿とまんじゅう二つの皿を子どもに出します。そうすると最初迷わずに二つ乗つた皿に手を出します。この時に、社会心理学の方では「もの心がついた」と言います。もの心がつくというのはそういうことです。

ところがしばらくすると、本当は二つの方が欲しいんだ

けども、氣を使うんですね。氣使いが始まる。どつちにしようか迷うようになる。これを「知恵づいた」と申します。こうして知恵づくことで本来の無邪氣さがどんどん失われていく。そこに理屈が絡んできて、理屈づけをしてくるわけですね。

一つを取る方が今度は礼儀になつてくるわけであります。本当は二つ欲しいだろうと。そこに戻れないものならどうしようという発想が道教とか禪にはあります。ですから、人が成長に伴つて身につけていく分別に対しまして、禪が重視するのは「無分別」というものなんです。分別する以前の状態です。無分別とはどういう状態か、なかなかわかりにくいかと思うんですけども、無分別という言葉で思い出しますのは、私が修行していた道場である天龍寺の、私の師匠のことです。私が道場に入つた頃は、まだ健在だったんですね。毎朝毛糸の帽子か何かを被りまして、自転車で山内を散歩されるんです。

入門した当初は、私はその人が誰だかわからない。どこかのおじいちゃんとしか思つていられないわけです。箒で掃いてますと「おはようござります」と、向こうから言つてくれ

ださる。「おはようございます」と応えます。

これは後で聞いた話なんですが、毎朝決まったコースを決まった時間に散歩してますと、ある場所で必ず同じ男性に会つたんだそうです。毎朝「おはようございます」と管長さんが声をかける。ところが返事しないんですね。

毎朝あいさつをして返事しない相手に、皆さん何日あいさつし続けられますか。

たいてい学校ではあいさつしなさいと言ふでしょう。これ儒教的です。あいさつて自然発生的なものでありますから、しろつて言われてするあいさつなんか、あいさつじやないと思つてるんです。

しかし、自分があいさつをして相手が応えないという状況が続いた時に、一体何日続けられるだろうかと思うんですね。そりやいろいろ分別しちゃいますよ。分別した挙げ句に説教し始める人が多いわけです。

しかし、この関牧翁老師という管長さんは、毎朝あいさつを返さない相手に、二年間あいさつを続けたそうです。その二年後に何が起こったのかというと、ある朝その男性が初めて「おはようございます」と応えて、その場に泣き伏したんだそうです。何が起つたのか詳しくはわかりません。しかし、そこで大きな変化がその方の中に起つたことは間違いないと思います。それは、きっと「あいさつをしなきや駄目じゃないか」と説教されることでは起らなかつた変化だろうと思うんですね。あいさつをしない相手に、二年間毎日あいさつができるという、そういうことは無分別じやないとできないわけです。

あるいは、私の友だちのアメリカ人でマーチンという男がいました。早くに父親を亡くしまして禅の修行がしたいと言つて日本にやつて来ましたが、道場に入る前にちょっと日本的生活に慣れるために、神戸のお寺にいたわけです。そこでは毎朝お粥なんですね。お粥つて、アメリカ人にすれば何とふがいない食べ物だろうと思うわけですよ。せめて牛乳を入れれば食べられるじやないかと。彼は袂に紙パックの牛乳を持って来てお粥にこそつと牛乳を入れたんですね。そしたら、住職さんがたまたまそれを見つけてしまつた。見つけた時に、その和尚さんは大笑いしたんですね。わつはははと大笑いしたんですね。大笑いされると大体やつてもいいのかなと思いませんか。

翌朝も彼は、また牛乳を入れたんです。翌朝も、また大笑いするんです。次の日も、その次の日も毎日毎日彼は入れ続けた。その和尚さんは毎朝同じように笑い続けたんです。

これ、できますか。大概分別のある方は、もう何日だ、二週間もあいつ黙っているからいい気になりやがってと、日にち数えるでしょう。最初は笑った人間もその初心を失っていくんです。どんどん大脑皮質でいろんな分別をしていくんですよ。あいつばっかり認めていたんでは他に示しがつかないだろうとか。

最初おかしかったわけでしょう。おかしかったという初心を保つことは、無分別じやないとできないんです。これは梅じやないんです。桃の世界なんです。

変な言い方かもしれないけども、キリスト教の方ではエデンの園に昔はみんないたと言うわけですね。アダムとイブがそこにいたわけです。しかし智恵の木の実を食べてしまった。りんごを食べてから罪を知つてしまつたというわけです。罪ある人間がいかに上手に暮らしていくかという考え方がキリスト教です。これはじつは儒教にも共通します。だから仁義や礼が大事になる。

一方、老莊思想とか禅は、この智恵の木の実を食べる前の状態に戻れと言つてゐるわけですね。そして、そういうふうになることは、恐らく可能なんです。毎日お粥に牛乳を入れるのを見て毎日同じように笑える人がいるんです。

一瞬阿呆かと思うでしょう。だから、大愚良寛という方が曹洞宗にいらっしゃいますよね。大馬鹿に見えるんですね。無分別というの。

桃がそういう考え方であるのに対し、梅というのは段々蓄積していつて進歩していくという考え方があります。若い頃はどうしようもないわけですね。梅の木だつて。老木こそ素晴らしいんでしよう。ごつごつして曲りくねつて、そこに花が咲くということがいいわけでしょうね。剪定してこういうのは邪魔だといって切っちゃつて、いい木にしていくというのが梅の木の育て方なわけですね。

教育というのはある意味でこの剪定がなくてはいけないだろうと思います。生命力の向かう方向があちこちばらばらでは、このエネルギーが十分に生かせない。ですから、エネルギーの向かう方向を一つに絞つていくという意味で、剪定というのは必要だらうと思うんです。儒教的な梅的な

考え方の中には、人間が段々完成していくという考え方があります。段々よくなつていく。子どもは、まだ子どもなんだからお前にはわかんないだろう。まだ小学生じやわかないだろう、中学生は、まだ子どもじやないかというわけです。

しかしそうなると、いつたいいつが最高なのかと。

ずうつと待つていたら、もうボケちゃつたからわかんない、なんてね。いつのまにかピークを通り越しちゃつたということになる。じゃあ、いつが最高なのか。

非常に難しいところでありますけども、孔子先生に言わせれば三十にして立つ。志を持つて身を立てるわけですね。四十にして惑わず。五十にして命を知る。自分の立てた志が天命にかなっていたと自信を深める。そして、六十になると耳順、反対意見を言われてもそれ程腹が立たない。この辺が全盛期でしょうかね。

七十になると従心。心の欲するところに従つて、しかも規を越えずと言いますが、それじやちょっとエネルギー不足じやないかと思うんですね。そのとおり、孔子先生は七十四で死んじやいます。

段々よくなつてやがて衰えるという、そういう考え方でありますと、そのくらいまでしか保たないんじやないですかね。一方、老子は百五十まで生きたといわれています。もつと長かつたという人もいます。ですから、人生の描き方が全然違うんです。儒教が段々よくなつて、また段々衰えていく。これ欧米人の考える人生と一緒にです。しかし、道教、老莊思想では、大体五歳がピークだという一派もあるんです。その場合は、つまり大人というのは最低の状態ですね。柔弱でもないし。しかし年をとるともう一度最高のときがやってくるんです。だんだんほどけてまた五歳に近づくんですね。しかしながら年齢で区分するよりも、禅では常に今が最高だと考えます。例えば今七十六歳だとしますと、今が最高なんですよ。なにしろ七十五年も待つてたんじやないですか。今が最高のはずですよ。いつでも最高というんですかね。

だから、どこがピークかということを考えたら今の自分がピークなんですよ。丸い地球の上に立つていて。どこに立つても地球のテッペンに立つてゐるんじゃないですか。そういう考え方を禅ではします。分別というのをできる

限り捨てるわけですね。

我々は大学で何を学んでいるのか、というと、主に分別だらうと思うんです。皆さんは地球が太陽の周りを回つているということを知つてますよね。しかし、地球が太陽の周りを回つているということを皆さんは実感でりますか。

例えは、今私は、そういう意味では秒速三十メートル以上の中まで移動をしてるんですよ。地球が回つているスピードで動いてるんでしょ。みんな動いているから動いてないよう感じているだけです。しかし、そういうことは実感できないでしょ。地球が太陽を回つてることは、本当に分別なんです。

実感としては太陽が地球を回つてることに決まつてないじゃないですか。それでいいんじゃないですか。皆さんの実感の方を重視する。天動説でいいんですよ。だって太陽が回つてくれているでしょ。私は宇宙の中心にいるんです。宇宙の中心で坐禅するんです。

そこが、まだ分別が起らぬ世界なんですね。

大学という所は分別を学ぶ所でもありますから、分別と無分別の兼ね合いが非常に難しかろうと思ひますけども、

無分別も忘れないでいただきたいと思います。

桃というのは無邪気と申しましたけど、言つてみれば影がないんですね。苦労を売り物にしない。梅つて苦労を売り物にするところがあるんですね。寒ければ寒い程強い香を放つと言うでしょ。寒ければ寒い程、だから苦労すればする程後でいいことがあると考へてゐるわけです。

苦労すればする程、後でいいことがあるんだよと思つていて大地震で死んじゃつたりするんですよ。あの苦労はどうなつたんだろう、ということになる。だから、大地震で死ぬということをどう考へるか。

例えはキリスト教では、大洪水が来てノア夫婦だけが生き残つた。これに理屈つけるわけでしょ。ノアが最も信心深かつたから生き残つたんだ、というわけですよ。

あの理屈で言わると大地震で死んだ人はそれなりの理由があるということになるでしょ。どこか行きに悪い所があつたんだろうと。

隣のおじいさんは生き残つて、うちのおじいちゃんは死んじやつた。うちのおじいちゃんは意地悪だつたんだろうか、というふうに、単純に因果律で考へ易い。そういう思

考の構造を儒教とかキリスト教は持つてます。

しかし、老莊思想は「天地は仁ならず」という一言で言つてしまひます。

あなたがいいことをしてた、悪いことをしてた、そういうことと自然現象は関係ないと言うんです。死ぬのも生き残つたのも偶然ですよ。いいことをしていれば自然災害に遭わないなんてことはないわけです。だから、いつ死ぬかわかんないんですよ。どんなに素晴らしいことをやつても。

ということは、将来にいいことが起こるためには努力するというんでは報われない可能性が強いということです。どうしたらしいのか。将来に貸しを残さない。今、満足してしまうことなんです。

どういうことか。例えばその辺ちょっと雑巾がけをしてくれと言われますよね。何で私がやんなきやならないんだろうと思ひながらやつていてる。我慢してやつてる。これはやっぱり、精神衛生上もよくない。

禅をやると、そう思ひながら雑巾がけなんかやらないようになるわけです。どうせやらなければならぬならば、

それを自分の楽しみに変えていくしかないでしよう。雑巾動かしながら自分の筋肉の動きに意識を向けていくとか、それに呼吸を合わせていくとか、自分のやり方に変えていくわけですね。

言われてやるということは世の中に生きていると起こりますよ。しかし、言われて嫌々やつてているのは絶対体によくないです。そうではなく、その場から十分結果としての楽しみももらっちゃうんです。そうすると、後々、将来に貸しはないですからいつ死んでもいいじゃないですか。

よくお通夜なんかに行くと、もう定年でようやくこれから楽しい時が始まると思ってたのに、とみんな言うわけですね。そんなことを言ってたら、そんな時はいつになつても来ないですよ。今日の分の楽しみは今日もらっちゃわないと。今日は我慢してやつたというのは今日を冒瀉しちゃつたようなもんですよ。いやー、いい一日だつた。このまま死んでもしようがないなと思うながら、毎日枕に頭を持つていくというとここまでいくと、大変なものあります。

それは道元禅師のおっしゃつた「修証一等」ということがあります。修行と悟りは一つで等しい。悟るために修行

をするんじゃないと言つてゐるわけですね。修行そのものが悟りだと言つてゐるんです。それはつまり、結果を後に期待して今を我慢するわけじゃないということです。

今やつてることから楽しみもそつくりいただいてしまうんですね。

これらの達人が観音様という方なんですね。あの人は何をやつても遊びとしてやつてますから。道元禪師や観音様に学んでいただきたいことがあります。

梅が正しさを主張するのに対して、桃というのは楽しきを主張しています。

よく心配症の人なんかが今の心配事がなくなつたら、きっと私も楽になるんじゃないかと言つて心配している人がいますよね。でも、心配の種つてなくならないつてご存じですか。絶対なくなりませんよ。心配症の人は一つのことが終わつたら、必ずあつといふ間に次の心配の種を捜してきます。そして、必ずそれは見つかります。

うちの息子はいつになつたら学校真面目に行くんだと心配していた人が、段々いつになつたら結婚するんだ。結婚したら、いつになつたら子どもができるんだ。子どもがで

きても、子どもの成績まで心配するんですよ。心配症の人つて心配するのが趣味なんですね。

だから、心配の種は決してなくなりませんから、心配するか安心するかは、たつた今どつちかを選ばなきやいけない。心配する人はずっと心配します。安心する人はそこで安心できるんです。安心に条件付けたら駄目ですよ。息子が、はたちになつたら安心するなんてことを言つてるとずっと安心できません。たつた今安心するんですね。これが桃の無邪気さでもあり、頓悟なんですね。

皆さんもご存じの言葉だろうと思いますけども、蘇東坡そとうぱという詩人が、「柳は緑 花は紅」と言つた。この考え方も老莊思想の上に乗つかつてゐる陶淵明の延長に来るわけですね。

柳は緑で、花は紅。何だそれは。普通それだけじや意味通じないでしょ。田中君は優しくって鈴木君は勉強ができると言つてるだけでしょ。分別しないとそういうふうになるんですよ。

でも皆さん分別しますから、田中君と鈴木君はどつちが頭がいいの、どつちが優しいの、と聞くんですね。それは

分別なんですよ。

柳は緑で綺麗だな、桃の花は紅で無邪氣で美しいなど、

直接感じたことが並列されているだけなんです。

田中君は優しいな、鈴木君は何と頭がいいんだろう。二つ並列して、それでいいじゃないかと言つてるんです。二どつちが頭いいの、どつちが優しいのって、他人との比較で考えるなよ、と言つてるのが禅なんあります。

その人の魅力が直接ドーンと伝わつてくる、それが優しさであつたり、頭のよさであつたり、いろいろなんです。鮮やかな緑であつたり、綺麗な紅であつたりするわけあります。

比較も分別もしない世界。それが桃の世界なんですね。無邪気さ、無分別の世界なんあります。

本当はもうちよつと用意してきたんですけど、教室の移動があるということでありますので、この辺で終わつた方がよろしそうなので終わらせていただきますが、今の「柳は緑 花は紅」ということをもつとわかりやすい言葉で言いますと、家風を認めるということです。

例えば、子どもが鼻たらしている。鼻たらしててはいけ

ませんよ。チーンとやりますよね。そういう教育は必要であります。

でも、五十歳の人が鼻たらしていたらどうしますか。ああ、そういう人なんだなって思いませんか。そういう人つているわけですよ。それは家風として認めるしかないことつてあるんですね。ちょっと大変な家風ですが。

教育してこういうふうに仕立て上げていこう、剪定していくことうという梅の発想と、そのまんま受け入れて認めよう、家風を認めようという桃の発想と、両方必要ななんあります。もちろん、桃一辺倒では社会生活はうまくいかない。梅も必要です。

しかし、人が幸せになるのは梅じゃないんです。桃的になつた時なんです。笑つた時なんですよ。無邪気になれた時に幸せを感じるんですね。そういうわけでありますので、これから桃を見たらそういうことを思い出しながら、笑つていただければ幸いでござります。

どうも長時間にわたりありがとうございました。